

壺中天

第9期 川崎 実希子

「今は昔、市場に壺公という菓を売る老人がおりました。しかし、不思議なことに、日が暮れると店に置いてある壺の中に入って行くのです。それをたまたま、費長房という青年が見てしまいました。彼は、壺の中の世界が一体どうなっているのか知りたくて、仕方ありませんでした。そして、ある日、とうとう老人に取り入って壺の中に入れてもらえるよう頼み込んだのです。すると、なんとそこには、竜宮城のような絢爛豪華な世界が広がっており、その老人に贅を極めた酒宴をもてなされたというのです。」

さて、表題は、私が小野ゼミに所属して以来、ハマっている言葉である。壺中天とは、中国の故事の1つであり、俗界と切り離された別天地のこと、あるいは、お酒を飲んで俗世間を忘れる楽しみのことだろう(三省堂大辞林)。ひょんなことからこの言葉を知って以来、このような世界はどこにあるのだろうか、いつか行ってみたいと、壺中天に思いを馳せてきたのである。そして、この妄想が爆発するのは、たいてい窮地に立たされたときであった。小野ゼミに所属して以来、私は、何度窮地に立たされたのだろうか。ディベート、ケース、マケ論、卒論、その他諸々…。特に、マケ論は、窮地の極みであり、執筆活動やブレゼンはもちろんのこと、活動の中で起こる仲間との衝突に日々もがき苦しんでいた。徹夜をして執筆活動を行い、明け方新聞配達のを聞くたびに、あるいは、徹夜をした翌朝、母親の出る夢をみて涙を流して起床するたびに、“ああ、壺中天に行きたい”と切に願っていた。

そんなこんなで、いよいよ私もあと数か月で卒業し、社会人となる。小野ゼミ時代を振り返れば、やはり、辛いことや苦しいことが一番に思い出される。しかし、写真の中の私は、いつも仲間と共に楽しそうに笑っている。いや、実際に、心底楽しんでいたのである。小野ゼミでは、ここでは書ききれないほどの素晴らしい思い出と、仲間に出会えることができた。いつも優しく手を差し伸べてくれる恩師、熱心に耳を傾けてくれる先輩方、かわいい後輩たち、そして、共に笑い合ってきた同期、すべての方に感謝したい。小野ゼミは、私の永遠の壺中天である。



恩師と仲間（著者は中央）



9期女子（著者は右から2番目）